

4 古典・現代建築歴訪の旅

4. 2 北欧の建築

ヨーロッパ大陸に戻って、北海に沿ってロッテルダムを経てアムステルダムに向った。イギリスの国際ユースホステル協会でもらったハンドブックとマップを頼りに、ユースホステルをさがしながら旅をした。アムステルダムはたくさんの小さい運河に沿って建物が並んでいる、大きな風車で水をくみ上げ、吊上げ橋をあげて船を通過させる。水面の高さがいろいろな生活に影響をおよぼしている。近代古典的建築の代表作の株式取引所といくつかの有名な建築を見て北上した。アムステルダムの大きな湾を海から、断ち切った様に作られたダム的な高速道を北上した時、よく見えたのは左側の海の水面が右側の湾の水面よりも3~4mも高く見えた。計画を立てた旅行の中で最北端となるフィンランドに向った。デンマークやノルウェーの国々を急いで通過して何度もカーフェリーを乗りつぎながら、一挙に冬の早い北欧のヘルシンキに入った。雪を避けて南下することを予定していた。覚えているのは、太陽の光が少ないからかもしれないが、細長いひよろひよろとした木の林の中の高速道路を何度も走りぬけた、そして、ムースと呼ばれるトナカイの大型の動物が高速道路を何度も横切った記憶である。

フィンランドは、建築家の巨匠アアルトの故国である。アアルトは私の恩師船越先生が大変好まれた建築家であり、私も好きな建築家である。イギリスの秋に比べて、北欧の秋は日中でも薄暗く、日が暮れるのが早い。日中でもライトをつけてドライブしてたことを思い出す。アアルトは、彼の多くの建物にトップライトとよばれる天窗を創ったが、そのことがよく理解できる。少ない太陽の光を出来るだけ建物の中に入れようとしたのである。アアルトの建築の中でも、特にオタニエミ工科大学の講堂の空間はす素晴らしかった。私は大変感激した。

フィンランドは、建築家の巨匠アアルトの故国である。アアルトは私の恩師船越先生が大変好まれた建築家であり、私も好きな建築家である。イギリスの秋に比べて、北欧の秋は日中でも薄暗く、日が暮れるのが早い。日中でもライトをつけてドライブしてたことを思い出す。アアルトは、彼の多くの建物にトップライトとよばれる天窗を創ったが、そのことがよく理解できる。少ない太陽の光を出来るだけ建物の中に入れようとしたのである。アアルトの建築の中でも、特にオタニエミ工科大学の講堂の空間はす素晴らしかった。私は大変感激した。

ブックストアー、アアルト設計、1962年
トップライトのガラスを上下につけ、自然の光をガラス面で反射させ内部に入れるようにしている。



高速道路が海を断ち切り、海のかなたに高速道路が消えていく。

Sweden- Finland. Viking Line Time Table.

Sept 1st 1976 - May 31st 1977.



Kapellskär — Mariehamn — Naantali
Stockholm — Mariehamn — Turku
Stockholm — Helsinki

 VIKING LINE

北欧の国々を結ぶフェリーに乗り、
3度ほど乗り継いでフィンランドに着いた。





オタニエミ工科大学の講堂の内部
やわらかい光が天井から降り注ぐ感じであった。



オタニエミ工科大学の講堂と付属の建物、アアルト設計、1955年
建物がキャンパスのランドスケープの延長のようにも感じられた。

曲線で作られた空間の形の美しさのみならず、天窗から間接的に入ってくるやわらかな光の感じが、なんとも言えないほど良かった。誰もいなかったその講堂の後の席に座って、あまりにも素晴らしい空間にしばらくの間、動くことが出来なかった。ヘルシンキの街をドライブし、アアルトの作品やリストにのせた建築をさがし、見てまわった。アアルトの設計した町役場の建物を、どうしても見たくて住所もはっきりわからないにもかかわらず、ヘルシンキから北上した。まだ10月であったのに、雪になった。道にはだいぶ雪が積もってきた。スノータイヤもタイヤにつけるチェーンもない。ハンドルを取られて、車が左、右へと揺れた。危険すぎると感じた。残念だが、行くことを途中で断念した。雪の中を引き返し、夕方近くになって、ユースホステルを見つけることが出来た。その片田舎のユースホステルのキッチンで、若い日本人が働いていた。

フィンランドの田舎のユースホステル
家族的な暖かみのあるホステルだった。



フィンランドアホール、劇場と大会議場、アアルト設計1962年
白い大きな建物は雪の風景にマッチする。



彼は北欧旅行中、金がなくなってしまって、ここで働いているのだという。いごごちがよくもう1年半にもなってしまったという。“雪の中、こんな所まで建物をさがしに来る日本人がいるなんて、信じられない。”と彼は私に言った。そして“2年ぶりに日本人に会った。”とも言った。その晩、そのユースホステスで大きなパーティーがあった。沢山のごちそうを作ったからといって、フィンランドの特別な料理を分け



雪の中に微かに十字架を見ることが出来た。十字架の大きさ、プロポーションが自然の木々にマッチし、それが感動のひとつだったのかもしれない。

でごちそうしてくれた。美味しかった。

次の日、雪の中、ヘルシンキに戻った。どうしても見たい建物、見なければいけないと思っていた建物が、ヘルシンキにあった。ヘイキ・シレン設計による、大きな十字架が芝生の上に建っている、小さな木造の教会だった。教会の中から大きなガラス窓を通して、その十字架を見ることが出来るように建てられていた。写真で見ただけでも素晴らしい建物だった。どうしても実物を見たいと思っていた。雪の中、人にたずねながら、雪をかきわける様にして探しあ

てた教会は、すでになくなっていて、2週間程前、その教会は火事で全焼してしまったという。真っ白な雪の中に、十字架だけが寂しそうに立っていた。私は雪の中で、ぼう然と立ちすくんだ。なんとも言えないショックだった。しかし感動した。真っ白い雪の中の十字架が、なんとも言えない程に美しく見えたからだ。

その後、同じ様なコンセプトで、著名な建築家フィリップ・ジョンソンがヒューストンに教会を設計した。又、安藤忠雄も人工池の上に建つ十字架のある教会を設計した。しかし、それらの教会の十字架よりも、この十字架ははるかに素晴らしい、と私は思っている。

私は北欧の建築が好きだ。自然に調和するように作られている空間が、やわらかい感じがする。北欧人の生活を表現しているからだろう。私も北欧に住んでみたいとも思った。あのユースホテルで働いていた、若い日本人の気持がわかる様な気がした。冬の早いフィンランドを後にして、南下し、再び何度もカーフェリーを乗り継いでストックホルムやコペンハーゲンの街々を見学しながらドイツに向かった。途中、建てられたばかりの、新しい美しい建物に出会うことが出来た。コペンハーゲンの郊外に建てられた教会で、ヨン・ウッソンの作品である。彼は、シドニーのオペラハウスのコンペで勝った建築家である。この真っ白な教会も、トップライトから入ってくる間接的なやわらかい光に感激した。再びヨーロッパ大陸に戻った。ドイツにもアアルトの設計した建物がいくつかあった。

バグスバード教会、ヨン、ウッソン設計1976年、外見の硬い感じの教会であるが高窓から入ってくる自然光が曲面壁に反射し、柔らかい感じのする教会になっている。





ウォルフバークの教会、アアルト設計1959年

それを見て回った。ハンブルグからアウトバーンとよばれる高速道路にのって西ベルリンに向った。だいぶ走って西ベルリンに着く頃になって、途中から道が急に悪くなった。車に乗るとなおみはいつもナビゲーターの役をして地図を見てくれていたが、その時は、彼女は疲れていて眠ってしまっていた。私はアウトバーンの出口を間違えたようであった。軍用トラックが目につく様になった。街の建物から明るい色が見られなくなった。突然、大きな広場に出た。いつもの様にツーリスト・インフォメーション・センターに行き、意義深い建物や、泊まる所等をたずねた。“あなたはここには泊まれない”と言われた。どうしてなのか分からなかった。隣にいた、ポーランドから来たという旅行者が、片言の英語で教えてくれた。“ジスイズ、コミュニスト、カントリー” 私は“ハッ！”とした。私は誤って、いつの間にか、東ベルリンに入ってしまったのだ。まだベルリンに東西を分ける厚い壁があった時代である。巨大な広場、確かに此処は、東ベルリンのアレキサンダープラザに違いないと思った。すべて、目にする色はカーキ色がほとんどだった。どこかで、道を間違えたのだ。とにかく早くここを出なければ、と思った。来るべき所でない所に来てしまったのだ。必死になって来た道に戻った。来た時なかったはずの検問所があった。如何にもドイツ人という感じの若い軍人がゲートのところに立っていた。車の中を全部調べられた。東ベルリンで買ったマップと小さい建築の本が見つけれられた。いろいろ質問され、車についているほこりまで調べられ、パスポートを取り上げられた。そしてゲートハウスの中に入っていった。日本の赤軍派が、中近東やヨーロッパに侵入して、テロ行為をしていた頃である。まさかその赤軍派仲間とは思わないだろう。しかしわからない。こんなところに普通の日本人がくるわけがないのだから。車をとりあげられ、共産国の牢に入れられたら、誰が助けに来てくれるのだろうか。日本の政府かそれともアメリカの政府か。私は好きで来たのでいいが、なおみだけは日本へ送り返してもらいたい等とも考えていた。恐怖に慄いて口が振るえて、そして渴いてきた。長いこと待たされた。もう一人の中年の上官らしき軍人と若い軍人と二人でゲートハウスからいかめしい顔をして出てきた。



扇の形をしたフロアプランのブレメンのハウジング、アアルト設計1958年

それを見て回った。ハンブルグからアウトバーンとよばれる高速道路にのって西ベルリンに向った。だいぶ走って西ベルリンに着く頃になって、途中から道が急に悪くなった。車に乗るとなおみはいつもナビゲーターの役をして地図を見てくれていたが、その時は、彼女は疲れていて眠ってしまっていた。私はアウトバーンの出口を間違えたようであった。軍用トラックが目につく様になった。街の建物から明るい色が見られなくなった。突然、大きな広場に出た。いつもの様にツーリスト・インフォメーション・センターに行き、意義深い建物や、泊まる所等をたずねた。“あなたはここには泊まれない”と言われた。どうしてなのか分からなかった。隣にいた、ポーランドから来たという旅行者が、片言の英語で教えてくれた。“ジスイズ、コミュニスト、カントリー” 私は“ハッ！”とした。私は誤って、いつの間にか、東ベルリンに入ってしまったのだ。まだベルリンに東西を分ける厚い壁があった時代である。巨大な広場、確かに此処は、東ベルリンのアレキサンダープラザに違いないと思った。すべて、目にする色はカーキ色がほとんどだった。どこかで、道を間違えたのだ。とにかく早くここを出なければ、と思った。来るべき所でない所に来てしまったのだ。必死になって来た道に戻った。来た時なかったはずの検問所があった。如何にもドイツ人という感じの若い軍人がゲートのところに立っていた。車の中を全部調べられた。東ベルリンで買ったマップと小さい建築の本が見つけれられた。いろいろ質問され、車についているほこりまで調べられ、パスポートを取り上げられた。そしてゲートハウスの中に入っていった。日本の赤軍派が、中近東やヨーロッパに侵入して、テロ行為をしていた頃である。まさかその赤軍派仲間とは思わないだろう。しかしわからない。こんなところに普通の日本人がくるわけがないのだから。車をとりあげられ、共産国の牢に入れられたら、誰が助けに来てくれるのだろうか。日本の政府かそれともアメリカの政府か。私は好きで来たのでいいが、なおみだけは日本へ送り返してもらいたい等とも考えていた。恐怖に慄いて口が振るえて、そして渴いてきた。長いこと待たされた。もう一人の中年の上官らしき軍人と若い軍人と二人でゲートハウスからいかめしい顔をして出てきた。

アレキサンダープラザ、東ベルリンの巨大な綺麗なプラザであった。私の悪夢のひとこまとなった舞台でもある。

